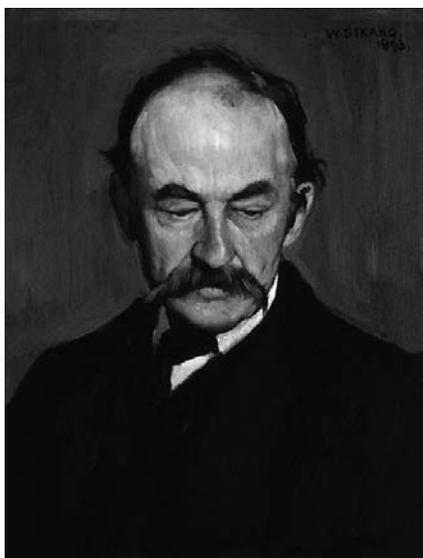


日本ハーディ協会ニュース  
NEWS from THE THOMAS HARDY  
SOCIETY OF JAPAN



第74号 (2013年9月1日)

発行者 〒162-8601 東京都新宿区神楽坂1-3  
東京理科大学1号館1603A研究室内 日本ハーディ協会  
編集者 〒573-1001 枚方市中宮東之町16-1 関西外国語大学 渡 千鶴子



By William Strang

提供:麻島徳子氏

## 『ジュード』のなかのモダニズム／ゴシック

玉井 暲

『ジュード』のなかで最も衝撃的な出来事と言えば、リトル・ファーザー・タイムが幼い弟妹を殺して自殺を図ったという事件であろう。そして、さらに注目すべきは、これらの三人の子供が首を吊っているシーンがありのままに小説空間のなかで描写されていることである。起った出来事についての暗示的な描写や目撃者らの報告による間接的描写は、このシーンについては採られていないのである。

小説空間のなかに自殺の現場を直接的に描くという叙述は、リアリズム小説のひとつの叙述のかたちなのだろうか。あるいは20世紀以降の小説によく見られるヴァイオレンスを取り上げるような現代的な小説につながる新しい叙述なのか。あるいは逆に、恐怖を掻き立てることを狙った18世紀末からヴィクトリア朝初頭に大流行したゴシック小説の名残りなのであろうか。つまり、この自殺シーンの描写は、モダニズムを志向するものであるのか、あるいは過去の旧式の小説手法にもとづいたものなのか、評価が分かれるところではあるまいか。

この問題をどう考えたらよいのか、ちょっと気にかかっていたのだが、最近になって、アメリ

カの若い研究者が出版した著書がひとつの示唆を提供してくれた。それは、Patrick R. O'Malley, *Catholicism, Sexual Deviance, and Victorian Gothic Culture* (Cambridge UP, 2006) である。オマリーによれば、この死した子供たちのぶら下がっているクローゼットはゴシック小説の系譜につながる典型的なゴシック的空間を喚起するものであるという（たとえば、ユードルフォの秘密の部屋、マチューリンの僧院の下の納骨堂、レディ・オードリーの宮殿の中の司祭の土牢、等々）。まさしくこの「非日常的な瞬間」こそ、この小説において、セクシュアリティの逸脱とキリスト教による圧迫とが交差して一つに結びついていることを表象する代表的なシーンの叙述として、大きな意味をもっているのだと主張する。ジュードとスーの生き方が性と宗教の両面における慣習との闘いであったと見るならば、この生き方がその極限あるいは頂上に達するのがこのシーンだと注目するのもうなずけよう。『ジュード』は、ゴシック的叙述のなかで古い慣習と新しい思想が、あるいは過去と現代が交錯し葛藤するダイナミズムを現出させることによって、次の時代の小説を志向するテキストになっていると、オマリーは評価する。

ジュードの子供たちの死のシーンについて、オマリーの現代的な評価とは異なり、いわばその反対の立場からコメントを残している批評家として、性心理学者で文芸評論家であったハヴェロック・エリス (Havelock Ellis) に注目したい。エリスは、小説家としてのハーディを高く評価し、『ジュード』が出版されるやいなや好意的な書評を発表した。そのなかで、このシーンを、この小説の「ただ一箇所の、重大な過失」として指摘している（『*Concerning Jude the Obscure*, 1896）。エリスが評価するのは、人間の日常的な社会のなかで、人間一般の背丈にもとづいて展開する生活や行動を描く小説家、つまりリアリズム作家としてのハーディであった。「『ジュード』においては、きわめて人間的な物語を形成するさまざまな要素をすべて、見事に自己抑制し、完璧に統御している」と述べ、「初期小説によく見られた悲惨なメロドラマは、ここにはまったく存在しない」と指摘するのである。このように『ジュード』を高く評価しながら、ひとつ承服できないのが、「寝室のクローゼットが急に開くと、死した子供たちの体が並んで見せつけられるとき」のシーンだという。エリスによると、このシーンに至るまでは、「われわれは、この物語がもっている力強さと冷静さ、一般的な人間のなかに存在するさまざまな関心を完璧に信頼する側面を賛美していたのだ。ここには、われわれ皆が知っているような性格をもった現実的な人間が描かれていると感じていた」。ところがあのクローゼットが開くと、そのとたんに、「われわれは、人間一般の生活がある大きな世界から放り出され、警察裁判所や精神病院の独房に投げ入れられて、たいていのわれわれには、それほど現実的とは見えない物事の真っ只中に放り込まれた気分になったのだ。これは、この物語では不必要な衝突だと思われる」と語る（Graham Clarke, ed., *Thomas Hardy: Critical Assessments*, Vol. 3 [Helm Information, 1993], 91-103）。

人間一般の背丈に見合った物語の展開が見られるリアリズム小説を重視するエリスにとっては、自殺した子供たちの現場をありありと描く叙述は、まさしく、初期のハーディ小説に見られる欠点であった「悲惨なメロドラマ」にほかならず、小説のモダニズムをめざしてほしいハーディにとっては望ましくない後退的部分だと判断するのである。

確かに、このシーンには、かつての古いゴシック小説的叙述が見られる。「突然、スーの悲鳴で彼は驚いてふりむいた」——ジュードの動作を捉えたこの文章が契機になって、われわれ読者は、ジュードの眼差しと一つになって、この凄惨な現場を、あたかも検視するかのよう、眺めていくのである。読者には目をそらすことは許されない。クローゼットのドアが、ちょうつがい（ちょうつがい）を重くきませた音をたてて開く。スーが床に倒れている。小さなベッドに視線を移す。しかし子供はいない。そこで小部屋を見まわしてみる。ドアの後ろの服を掛ける二本のかぎに視線を移す。すると二人の子供の体が、首にトランクの紐を巻きつけて、ぶら下がっている。少し離れたところに視線を移動すると、小ジュードの体が同じようにぶら下がっている。彼の目を見ると、

どんよりした目を開けて斜めに部屋の中を見ている。あとの二人の子供の目を見ると、閉じていた（藤田繁訳参照）。

このように、読者の視線をジュードの視線に合わせることにより、現場風景を体験させながら恐怖を喚起していく手法は、まさしくゴシック小説的である。

そういえば、『ジュード』の前の小説『テス』においても、殺害シーンにおいて、同様の描写手法が採られていた。ひとつ異なるのは、殺害の行われた現場が描かれてないことくらいだ。アレックとテスの住んでいる二階の部屋の真下で、ミセス・ブルックスは何気なく天井を眺める。ここからは、読者はミセス・ブルックスの視線と一体化して天井を見つめていくことになる。「彼女の目は白い表面の中程にある一点に止まった」。それは、ウエハースほどの大きさだ。やがて手のひらほどの大きさに変わる。赤い。ハートのエースに見える。テーブルに上がって天井のしみに触れてみる。湿っている。血痕のようだ。テーブルから降りる。耳をすます。すると、ボタン、ボタン、ボタン、と血が滴ってきた（高桑美子訳参照）。

読者の視線を操作するハーディの手並みは見事なものである。ただし、このようなゴシック的叙述について、ハヴェロック・エリスと現代のハーディ学者オマリーのあいだで評価が分かれる。ハーディの小説空間は、一見旧いと思われる部分に新鮮な意味を含んでいる場合が少なくないのがいまさらながらに実感させられるのである。

## Florence E. Hardyの書簡に見る “Satires of Circumstance”

土屋 倭子

Florence E. Hardyは最初の妻Emmaに比べて、おびただしい数の書簡を残している。それらは幸いなことに、Michael Millgate編の*Letters of Emma and Florence Hardy* (1996) に主なものは収録されている。しかし残念なことにここに収録されていないものもかなりある。

『日本ハーディ協会ニュース』第70号（2011年9月1日）で、故大榎茂行氏がFlorenceのEthel Inglisに宛てた28通の未公開の手紙を甲南女子大学図書館が「トマス・ハーディ・コレクション」として所蔵したこと、さらにその興味深い内容について貴重な一文を寄せておられる。ここでしか目にするのでできないFlorence直筆の手紙に出会えるとは、誠に嬉しいかぎりである。筆者自身、かつてEton Collegeの薄暗い図書館で、所蔵のFlorence自筆の手紙を何通か見せてもらったことがあるが、限られた時間で、読みづらい筆跡と格闘してひどく疲れたことを思い出す。Florenceの手紙はDorset County Museumを始めとして世界のあちこちの図書館に散在していると思われるから、ここではMillgate編のものを主たる手がかりとして、伝記などで引用されているものを参考にしながら考えたことを記したい。しかしそのような限られた条件下であっても、Florenceの手紙は彼女がおかれた人生の皮肉な状況“Satires of Circumstance”を生々しく見せていて、実に興味深い。そのいくつかを取り上げてみたい。

Millgate編のFlorenceの手紙は1906年11月20日、British Libraryへの入館許可を求めるものから始まる。その後、4年近い空白があって1910年7月2日のHardyの友人Edward Clodd宛の手紙が収録されている。そして1910年11月19日の同じくCloddに宛てた手紙に読者はどきりとさせられる。どきりとさせられるのは、次の一節である。“Mrs Hardy seems to be queerer than ever. She has just asked me whether I have noticed how extremely like *Crippen* Mr TH. is, in personal

appearance.” (*Letters* 68)

Dr.Crippen事件とはCrippenが妻を毒殺して、地下室の床下に隠し、事件が発覚しそうになると、タイプストで愛人であったLe Neveを男装させ、父子を装ってカナダへ逃亡を図ろうとする。しかし船長が不審に思ったことから船上で逮捕され(1910年7月3日)、ロンドンで処刑された(1910年11月23日)という当時のもっともセンセーショナルな事件であった。Emmaがこの不気味な話題をあえてFlorenceに持ち出すというのは、極めて深い意味があると思われる。EmmaとFlorenceとHardyはその時点でどのような関係にあったのだろうか。

HardyとFlorenceは1905年8月10日のHardyのFlorence宛の手紙が残っていることから、その頃に知り合ったと思われる。HardyはEmmaの突然の上京のために、急遽CloddにFlorenceの『テス』のオペラ鑑賞に際してのエスコートを頼んだ。そのあとに出した手紙で「彼女とは数年来の知り合いだ」(1909年7月22日)と二人の関係を打ち明けている。

EmmaとFlorenceの出会いの経緯ははっきりしないようだが、1910年の夏頃ロンドンの女性知識人のクラブであるLyceum Clubで出会い、EmmaはFlorenceをたちまちロンドンのアパートやMax Gateに招待した。Florenceがいかに有り難くその招待を受け、いそいそと馳せ参じたか、その世辞や追従の数々はMarguerite Roberts, *Florence Hardy and the Max Gate Circle* (1980) に詳しい。これらはMillgateの書簡集では完全な空白の部分である。この時EmmaはFlorenceをも利用して自分の書いたものを発表する機会を得ようと躍起になっていたのに対して、Florenceの方はHardyの推挙により既に*Cornhill Magazine* (1908年6月)にHardy的な要素を明らかに示す短編‘The Apotheosis of the Minx’を発表しており、翌年1911年の2月号にはHardyの校正の跡がみられる‘Blue Jimmy’が掲載されようとしていた。

またHardyの第三詩集*Time’s Laughingstocks* (1909年12月刊)には、‘On the Departure Platform’が含まれていたし、1910年8月号の*Spectator*には‘After the Visit’が掲載されていた。二つの詩には巧妙な脚色がなされていたが、うたわれているのがFlorenceであることは知る人ぞ知るといってよかっただろうか。Emmaは自身の文学的な野心に燃え、詩集まで出版したいと願っていたのだからその間の事情を何も知らないとは考えられない。FlorenceはEmmaがそれまでのHardyと自分との関係には少しも気づいていないと心底思っていたのであろうか。そう思っていたから、‘queer’といった客観的な言葉を用いたのであろうか。Crippen事件をあえて持ち出したEmmaの内心はqueerといった程度のもものではなかったはずである。そしてHardyの方は妻とFlorenceがMax Gateで親しくなっていく状況をどう眺めていたのだろうか。三者三様の裡なるドラマを覗くような手紙だが、Florenceのおかれた人生の皮肉な状況を鮮明に映し出していると言えよう。

いわゆる*Life*の制作過程についても、彼女の手紙は所々で危うくもその生成の秘密を洩らしている。Hardyは著作管理人に指名したSydney Cockerellに奨められ、有能なFlorenceの助力を得て*Life*となる仕事に1917年頃から取りかかり、1918年はそれに没頭する。Hardyは古いノートや資料などを年代順に整理して、自ら書いたものをFlorenceにカーボンを使用して3枚重ねでタイプさせた。この秘密裡に実行されたやり方についてはMillgate編の*The Life and Work of Thomas Hardy* (1984)のIntroductionや*A Biography Revisited* (2004)に詳しく述べられている。つとに、R.L.Purdyの*Thomas Hardy: A Bibliographical Study* (1954)によってHardyがゴーストライターであることはよく知られていたのだが、Millgateのこの書によってHardy自身が書いた姿が初めて明らかにされ、さらにその巻末の‘Selected Post-Hardyan Revisions in *Early Life and Later Years*’によってFlorenceの改変の実態が示された。

Hardyにとって「自伝」という言葉が禁句であったことがFlorenceのCockerell宛の次の手紙(1918年2月7日)から明瞭に見てとれる。“With regard to the notes, I realize that on no account

must we mention the word ‘autobiography’ or call them ‘autobiographical’ .…but I would not breathe a word about it to anyone except yourself.”

この直前にはやはりCockerellに宛てて、Hardyが次々にrevisionを繰り返し、ついには今まで書いたものを破棄して、書き直すまで言い出していると訴えている（1918年1月20日、*Letters* 137、*A Biography Revisited* 480）。この秘密の作業はCockerellには共有されていたし、Hardyが最後まで手を加えたことはDaniel Macmillanにも伝えられている（1926年7月14日、*Life and Work*, xviii）。Florenceの手紙は所々で*Life*生成の秘密を洩らしているのだ。

Hardyの死の直前まで、このようにして制作されたMaterialsまたはNotesと呼ばれていたものは、Florenceによって死後出版されることになるのだが、彼女は、Hardyの死や葬儀について自分が書くべきものに加えて、全体のrevisionsという重責を担うことになった。James BarrieやT.E.LawrenceやE.M.Forsterなどなど年来の友人たちへの手紙はFlorenceの陥った混乱や苦悩を物語る。そして彼女の皮肉な状況をもっともよく表しているのは「おそろしく客観的な」と評される次の箇所であろう。“In February of the year following (1914) the subject of this memoir married the present writer.”

*Life and Work*では“the subject of this memoir”によって“the present writer”はthe first Mrs Hardyの友人としてのみ紹介されている（378、392）。しかしこれらの部分は“the present writer”によってばっさりと削除されたのである。FlorenceのこうしたrevisionsはHardyとFlorenceの間の見えない確執とFlorenceのおかれた皮肉な状況を想像させる。結果的に*Life*は二人の手になる実に不思議な合作になったと言えよう。

紙数の関係で、詳述できないが、Florenceの手紙には彼女が直面した人生の皮肉な状況がその他にも多々見出される。‘Poems of 1912-13’に打ちのめされ、自分の立場がかつてのEmmaと逆転したと嘆いたり、Hardy PlayersのヒロインGertrude Buglerに夢中になったHardyのことでは周囲の忠告も聞かずに愚行に走ったりなど。さらにHardyが世間慣れしていないFlorenceのためと考えて選んだ著作管理人のCockerellとは、Hardyの死の直後から、葬儀や記念碑や遺作の出版などを巡って真っ向から対立することになったのも、また皮肉な状況であった。Florenceの手紙にはCockerellへの不信と不満が縷々記されている。

しかしこうしたなかでも筆者にとって、何にもまして皮肉な状況と思えるのは、Hardyの妻として、housekeeper、companion、secretary、nurse、そして朗読係とありとあらゆる仕事を背負い、特にその返事をすべき手紙の山に追われ、「私の仕事やキャリアのために使われるべき全てのエネルギーと時間は手紙書きのために失われてしまった」（Rebekah Owen宛、1917年12月13日）と嘆いたFlorenceのまさにその手紙類が今、研究者らの間で脚光を浴び、発掘され、読まれ続けていて、彼女の文学的野心の結晶とも言える、短編類や児童向けの幾冊かの書物は、それらの手紙との関連においてのみ読まれているという現況ではなかろうか。

## ハーディと私 その後

—英国トマス・ハーディ協会 “Tess Anniversary Walk” に参加して—

今村 紅子

ウィリアム王子とキャサリン妃のロイヤルウェディングにイギリス中が喜びにわいた2011年4月。黄色いラッパ水仙が咲き乱れるイングランドの春の訪れとともに、ケンブリッジ大学での私

の在外研究がはじまりました。

そして、2011年はトマス・ハーディの『ダーバヴィル家のテス』(1891)出版から、ちょうど120周年目にあたる年でした。英国ハーディ協会では、それを記念して“Tess Anniversary Walk from Flintcomb-Ash to Emminster”と銘打った徒歩旅行、そして、オペラ用に脚色された『テス』の上演会が行われたのです。今回、在外研究をきっかけにして、実際にハーディ作品の舞台を訪ねたことは、私にとってハーディとの新たな出会いとなる貴重な経験となりました。

ハーディの故郷、イングランド南部のドーチェスターは、ケンブリッジからキングスクロスを経由して、ウォータールーからウェイマス行きの電車で約4時間半ほどの距離にある、のどかな田舎町です。ハーディのウェセックス小説群で、カスターブリッジと名付けられたドーチェスターの町を歩くと、ハイ・イースト・ストリートのキングズ・アームズ・ホテルや、テン・ハッチズの水門など、たちまちハーディ小説の時空にひきこまれたような気分になります。さらに、茅葺屋根が美しいハイアー・ボックハンプトンのハーディの生家。キプリングやH.G.ウェルズ、J.M.バリーにバーナード・ショーといった作家たちが後年に訪れたMax Gateこそ、建築家ハーディの設計にほかならぬものでした。ビスケットの缶詰に入ったハーディの心臓が埋葬されたスティンズフォード教会まで足をのばす頃には、一面が夕焼けのオレンジ色に染まり、あたりはドーセットの自然と小説世界が溶け合って、幻想的な雰囲気になりました。

『テス』出版120周年を記念した“Tess Anniversary Walk from Flintcomb-Ash to Emminster”は、ヒロイン、テスがフリントコム＝アッシュからエミンスターを往復した道のりを、英国ハーディ協会の会員とハーディ愛好家で、実際に歩くという企画です。現実のドーセットの土地をふまえながら、ハーディが作りあげたウェセックス世界のテスの足跡をたどるのです。18マイル(約29km)におよぶ距離を7時間かけて、以下に記したⅠからⅥまでの行程にそって歩く“Tess Anniversary Walk”は、2011年9月17日に開催されました。晴れ渡った青空のもと、緑あふれるイングランドの田園地帯を歩きながら頬に感じた一陣の風に、すがすがしさと心地よい疲労感を感じたことが、まるで昨日のここのように思い出されます。

Ⅰ. On Tess' First Arrival in Flintcomb-Ash (第42章)…農場から農場へと職を求めるテスが、ついにフリントコム＝アッシュの瘦せた土地にたどり着く場面。テスは田舎家の軒下で雨宿りをしながら、壁越しに伝わる暖炉のぬくもりを感じている。ここを起点にテスは、夫エンジェル・クレアの父の牧師館があるエミンスターを目指す。\*サーン・アバス北東の村Alton Pancrasの北東、Church Hill付近。Ⅱ. On the Hilltop at Flintcomb-Ash (第41～43章)…マーロット村がある谷と、トールボットヘイズのある谷の間にひろがる、起伏の多い白亜の台地にテスは到着する。この高原には、お碗を伏せたような盛り土がならぶ景色が広がり、前方の中景にはブルバロウの、ネットルクーム・タウトの頂がみえる。\*B3143号線沿いHenley付近。Ⅲ. Above Minterne Magna (第44章)…冬の日曜の朝、テスはフリントコム＝アッシュから、エミンスターへ向けて出発する。エンジェルとの結婚式からあと一日で満一年。ふたりが離れてから、満一年にはあと数日足りない。眼下には肥沃な土壌の広大なブラックムーアの谷が広がる。\*A352号線沿いDogbury Gate付近。Ⅳ. Devil's Kitchen / Viewpoint below High Stoy (第44章)…ブラックムーアの谷を右手に、テスは西へ進む。ヒントックの村々の上を通り過ぎて、シャートン・アバスからカスターブリッジへの街道を直角に横切る。「悪魔の台所」と呼ばれる狭い谷をはさんだドッグベリーの丘とハイ＝ストイの山裾を迂回する。\*Blackmoor ValeはSturminster Newtonの北に位置する。シャートン・アバスの実名はSherborne。Ⅴ. Cross-in-Hand (第45章)…奇跡か殺人が起きた場所を示す不吉な石柱、「クロス・イン・ハンド」にテスは片手を嫌々置いて、アレックを誘惑しないという誓いを立てる。\*Batcombe南の道路沿いに実在する直立した石。Ⅵ. Evershead (第44～45章)…ロング＝アッシュ小路というローマ道路を横断し、丘をおりてエヴァシエッド村に入る。帰

路には、説教師となったアレックと再会して、テスは恐怖で身がすくむ。\*エヴァシエッドの実名はEvershot。ドーチェスターの北西18km。Horsey Knap & Benvill Lane沿いの約5km地点にToller Down Gate。Ⅶ. Toller Down (第44章)…長旅の後半、テスはなだらかなベンヴィルの小路をたどる。目的地が近づくとつれて、別れた夫の父親にわざわざ会いに行くもくろみに恐怖を感じ始める。\*Benvill Lane (Benville Lane) からToller Down Gateに向かい、そこを横切ると“The Dark-Eyed Gentleman”というハーディの詩に登場する Crimmercrock Lane (Cromlech Crock Lane) がある。Ⅷ. Above Emminster (第44章)…正午近くに、テスはエミンスターと牧師館のある盆地のはずれに立ち止まる。牧師と会衆が集う日曜に、町を訪れたことを悔いている。エンジェルの父、クレア牧師との面会に備え、ブーツからエナメル靴に履き替える。エンジェルの2人の兄とエンジェルの妻になるはずだったマーシー・チャントに遭遇。\*エミンスターの実名はBeaminster。ブリッドポートから北へ8km。Ⅸ. The Vicarage (第44章)…テスはエミンスターの牧師館を訪ねるが、クレア一家は、教会の朝の日曜礼拝のため不在。結局、エンジェルの父に会えないまま、フロントコム＝アッシュからエミンスターまでの15マイルにおよぶテスの奮闘は徒労に終わる。\*River BritとBridport Roadへ続く道。右手には小さな町の市場。Church Lane をたどればSt. Mary’sがある。

今回の“Tess Anniversary Walk”で、『テス』のテキスト朗読やハーディが作った地名の解説などをしながらドーセットを案内してくださったのは、*Hardy's Landscape Revisited: Thomas Hardy's Wessex in the Twenty-First Century* (Robert Hale Ltd, 2010) の執筆者で、協会のChairmanでもあるTony Fincham氏です。英国ハーディ協会のVice-Presidentも務められた深澤俊先生が、あらかじめ日本からイギリスのFincham氏に連絡をとって手筈を整えてくださいました。また、『テス』のオペラ会場では、『ハーディ全詩集』の編纂をされた故James Gibson氏の奥様にもお目にかかることができました。この場を借りて、ハーディ・カントリーで素晴らしい経験をさせていただきましたことを心より御礼申し上げます。

## ハーディと私

高橋路子

これまでヴァージニア・ウルフの作品を主な研究対象としてきたこともあって、今回「ハーディと私」を執筆するにあたって、ついハーディとウルフの比較をしてしまう。ハーディとウルフの小説を比べてみると、両者は作風もテーマもかけ離れている。例えば、ハーディが19世紀半ばから後半にかけてのドーセットを背景に、主に農村部に暮らす人々の営みを題材として扱ったのに対して、ウルフの作品の多くは20世紀初頭から前半にかけてのロンドンが舞台であり、登場人物は中上流階級がほとんどである。さらに、ハーディの作品におけるドラマが男女の間で起こるとするならば、ウルフの作品ではむしろ女同士の関係に焦点が当てられている。このように、ウルフとハーディの作品に接点を見出すのは難しいが、両者の作品の中心には、つねに「女」がいる。これまでウルフの作品に限らず、文学作品におけるジェンダー表象の問題に興味があって、研究してきた私にしてみれば、これは重要な出発点である。

確かにハーディの小説に登場する女性たちは、ほとんどの場合が、男性の視点から描かれている。そして、テスやスーの場合がそうであったように、しばしば男性登場人物たちの勝手な思い込みや願望が作り出した偶像にすぎないことがある。ハーディは、男性が抱く女性にまつわる神話（純潔、従順、貞節）と作中のヒロインたちとの間に、あえてズレを生じさせ、両者を衝突さ

せ、摩擦を起こさせることで、その破壊的な力をますます大きなものに行っているようである。

ユーステイシア、ルセッタ、テス、スー、彼女たちは男性登場人物たちの理性を狂わせる。そして、彼女たちは皆、我が身を燃えつくしてしまうほどの情熱の持ち主である。その意味では、ハーディ作品のヒロインたちは、いわゆるファム・ファタールであり、魔女である。にもかかわらず、いや、そのためにと言った方が適切かもしれないが、ハーディの描くヒロインたちは皆、魅力的であり読者の心を捉えて離さない。作家ハーディがそういった魔性の女たちに共感的であったということだろうか。

周知のとおり、英国には魔女の長い歴史がある。魔女狩りや魔女裁判こそ近代以降衰退したとはいえ、魔女に関する法律が20世紀半ばまで存在したというのは、社会の水面下で魔女信仰が存続していたことを物語っている。もちろん、「魔女」とは何かということについては諸説あるだろうが、ある共同体が新しく変化する際に、社会的弱者である女性は、しばしば人々の不満や不安をぶつけるための格好のスケープゴートとなったという説は、かなり説得力がある。英国においても、村落単位の社会から、エンクロージャーが進められ、個人単位の社会へと変化していくときに魔女が多く出現したと言われている。この観点から見れば、「魔女」とは社会ないし時代の変革そのものを象徴しているという見方も可能であろう。

ハーディの小説において、いにしへの魔女を彷彿とさせるヒロインたちが登場し、しばしば悲劇的な結末を迎えるのは、それぞれの共同体が大きく変わろうとしていることの表れなのかもしれない。ハーディの小説における「女」とは、男性社会であるウェセックスという世界が発展していくために必要な生贄であると同時に、その世界をも脅かす潜在力を持つというパラドックスを孕んでいる。

その一方で、ウルフの作品には、ハーディの小説に見られるような魔女は登場しない。ウルフの小説で記憶に残るのは、社会的規範を逸脱した生き方や考え方を貫いた女性よりも、クラリッサ・ダロウエイやラムジー夫人のように、ヴィクトリア朝的な価値観を体現し、いわゆる「家庭の天使」としての生き方を受け入れたヒロインの方である。彼女たちの内面の葛藤が読者の共感を呼ぶのである。もちろん、社会的なアウトサイダーとしての「女」が消えていなくなったわけではない。例えば、孤独な女性参政権論者や、宗教的信仰に救いを求める貧しい歴史家や、なかなか作品を完成させることができずにいる画家など、姿を変えながらもそういった女性たちはウルフの作品にも登場する。興味深いのは、ウルフの作品では、社会の周縁に追いやられた女性たちは、決して魅力的な存在として描かれていないことである。

このように、ウルフが描く「女」像は、男女関係というよりは、女同士の対比の中から浮かび上がってくる場合が多い。妻であり母である「家庭の天使」の存在は、別の生き方を選択した女性たちを追い詰め、苦しめる。その意味では、ウルフの作品においては、家父長制社会を象徴する「家庭の天使」こそが「魔女」なのである。ダロウエイ夫人やラムジー夫人は、男女に関わらず周囲の人間を虜にしまうほど魅力的な存在として描かれながらも、他人の人生を狂わせてしまうほどの破壊力も兼ね備えているからである。

こうして見ると、ハーディとウルフの作品は、ともに「女」を中心に据えながらも、全く別のテキストを提供しているように思われる。その違いはどこから生まれるのだろうか。地方と都市という地域性だろうか、男性作家と女性作家の違いだろうか、それとも階級が関係しているのだろうか。あるいは、「魔女」の表象が推移した背景には、19世紀から20世紀にかけて英国社会が大きく変化したことが関係しているのかもしれない。ハーディとウルフ、それぞれのテキストで表象される「女」たちを比較する研究は、今始まったばかりである。

# 文学ゼミの現場から

風 間 末起子

日本の英文学科に元気がなくなってから久しいが、あれから皆さんはどのような方針で授業現場を牽引なさっているのだろうか？

新カリキュラムの作成にエネルギーを費やしたり、学科の改組を図ったりと、ここ10数年間、英文学科では、文学の研究者である私たちには辛い時期が続いている。

そこで今回、特に英文学科の文学ゼミの場合を考えながら、雑ばくな話になるが思いつくままに話してみたい。まずは問題点から。英文学研究の基礎中の基礎である精読のこと。あらかじめ指定された作品をきちんと事前に精読した上で授業に臨むというスタイルは、10数年前の文学ゼミならば当然のことで、この様式が成立していなければ授業が成り立たない、というのが英文学ゼミの暗黙の了解事項であり、ルールだったと思う。

しかしながら、小説の英語は、他の散文よりはたいてい難解で、しかも、TOEICの試験対策にも、ここまで難しくやっかいな長文はさして有用でないという現実もあり、かといって、哲学を振りかざして、「文学はその国独自の文化と人間理解への近道。試験に役立つような味も素っ気もない例文を覚えるのとは次元がちがう。それに、すぐに役立つ英語なんて、結局、賞味期限も早いわけで」と必死に訴えても、研究者になる予定もない学生にはピンとこないし、果ては文学集団の必死の金切り声に聞こえるかもしれない。

どこの大学でもそうだと思うが、TOEICやTOEFLの試験のスコアは大学の英語教育への気合いを示すための指針となっている。これにウンザリの英語教員も多いだろうし、特に文学系の教員のウンザリは頂点に達しているだろう。しかし、先日、嘱託講師の懇談会の席で目から鱗的な発言を耳にした。「早いとこ、TOEICで600～800点を取ってしまっ、次のステップに移行できるように学生たちを促したらどうでしょう？」というご意見にはなるほどと思った。学生たちにしても、資格試験やスコアのアップばかりに4年間を費やすのは馬鹿げていると気づいているはずで、しかしそれでもTOEICは現代の若者の通過儀礼でもあるので、そのための科目も設置して、しかしだからと言って、これに4年間も傾注するのではなく、上級学年では英語をツールとする「本物の勉強（コンテンツ）」に入っていく。つまりは「とっととTOEICの卒業」を目標にしてTOEICに取り組むわけだ。それにTOEICはやはり英語学習なのだから無駄なはずはない。

次にコンテンツ学習の中での取り組みである。おそらく、TOEICのスコアの高い学生はすでに自学自習が身につけているので、彼女たちは「精読を厭わないだろう」と想像したいが、実際はそんなに簡単ではない。ここで、精読を嫌う学生に腹を立ててフテくさるという方法もあるが、ここがベテラン教師の腕の見せどころとなる。

私の場合、5年ほど前から、学部の授業でハーディの小説を取り上げていない。文化的な要素も取り入れながら工夫を試みたが、女子学生たちは、ハーディ小説には感情移入がしにくいようで、あまり面白がってくれない。

そこで、今はハーディをいったん中止して、ここ数年間、ブロンテ姉妹の小説をゼミで扱っている。特に *Jane Eyre* (1847) には、学生指導用の教師のためのマニュアル本もアメリカから出版されており、これがかなり役立っている。衣食住、映像との比較、キリスト教との関連など、さまざまなテーマのもとで、『ジェイン・エア』が学習できる。20才前後の女子学生にとっては、女性のキャリアや人生との真剣勝負という面で、『ジェイン・エア』は人気があるのかもしれないが、優れた作品は精読嫌いな学生にも訴えるところがあるようだ。女子学生という枠で作品を選んでダメだと思う反面、実際には、まずは登場人物に感情移入ができる作品、次に多方面か

らのアプローチが可能な作品を選ぶということが重要だと思う。

どこの大学でもそうだと思うが、今、私の大学ではキャリア教育に気合いが入っている。つい最近、私も3年次生対象の就職セミナーに参加した。そこで「就活の神様」という著名な講師の講演があった。胡散臭いと思いながら出席してみたが、この講演が目から鱗であった。人生全般の哲学を語っていて、決して即物的な内容に終始したものではなかった。就活にはまず、「前に踏み出す力」が大切という説明は、授業にも通じるものと痛感した。

「精読が大切」という捨てきれない私の思いを、卒業まででなくてもいいから、卒業後わかってもらうには、学生自ら食指を伸ばせるように、教員側にもかなりの仕掛けが必要となる。どなたか、ハーディ文学の劇画化を試みていただけないだろうか。

## 《シンポジウム予告》

### トマス・ハーディにおけるヴィクトリアニズムと〈信仰〉

#### イントロダクション

向井秀忠

トマス・ハーディは、若い頃にキリスト教に対して懐疑的となり、ダーウィンの進化論やショーペンハウアーの思想などの影響を受けたこともあって、彼の小説世界では「内在意志（"Immanent Will"）」によって翻弄される無力な人間たちの姿を描いていると説明されることが多い。確かにそのような悲観的な傾向は強く読み取られるが、歴史的な視点から小説を読み直していくと、失ったと説明されることも多いキリスト教に対する信仰が実は彼の中に残っていることを伺える記述を作品に見出すこともできる。

本シンポジウムでは、そんなハーディの〈信仰〉の問題について再考することとし、具体的には、教会建築家としてのハーディ、進化論の影響を受けたダーウィン主義者としてのハーディ、キリスト教のあり方を再考するハーディについて論じ、彼が〈信仰〉の問題をどのように考えていたのかについて再考するための手がかりとしたい。ここでの〈信仰〉は、宗教的な意味にとどまらず、もっと広い意味で何かを強く信じることを指すこととする。

#### 建築家ハーディのゴシック・リヴァイヴァリスト人脈と教会建築観 近藤存志

トマス・ハーディは自身の建築家としての作風を形成する過程で、アーサー・ブルームフィールド、ジョージ・エドモンド・ストリート、ウィリアム・パージェス、ウィリアム・バターフィールドといった、当時アングロ・カトリックないしは中世カトリック的教会建築観との関わりを強めていたゴシック・リヴァイヴァルの建築家たちから影響を受けたことが知られている。また、ローマ・カトリック教会とは明確に区別される「イングランド・カトリシズム」の再興を唱えた熱烈なゴシック・リヴァイヴァリスト、A・W・N・ビュージンも、ハーディの建築観に重大な影響を与えたと考えられている。ハーディが、中世ゴシックを理想視する伝統的教会建築観を持つ建築家たちとの交わりや、そうした建築家たちの作品と著作に関する学びを通して、自らの教会建築の設計と保存に関する指針を確立したことは、彼が1906年にSociety for the Protection of Ancient Buildingのために準備した小論 'Memories of Church Restoration' の中にはっきりと読み取ることができる。本発表では、ビュージンが中世ゴシックを賞賛するために著した一連の書物との内容的類似性も指摘することができるハーディのこの論稿を中心に、建築家ハーディのゴシック・リヴァイヴァリストを中心とした人脈とその教会建築観に注目したい。

## 物語としての信仰と進化論

福原俊平

ハーディはキリスト教には懐疑的であったが、彼の作品には、宇宙や世界には何らかの原理や法が存在しているという考えが見られる。その原理の中でも特に重要なものがダーウィンの進化論であり、ハーディは生物学の枠組みを通して、人間社会のあり様を理解し、受容しようとした。ダーウィンの著作は学術書ではあるが、ジリアン・ピアが『ダーウィンの衝撃』で論じたように、一つの物語的な枠組みを提示している面がある。その点において、宗教に世界を理解する物語的な枠組みという側面があることと同様である。言わば、ハーディはキリスト教的な枠組みで世界を理解する代わりに、ダーウィニズムという枠組みを通して、世界を物語化して理解し、その理解を小説化したと言える。本発表では、物語論の観点から、ハーディ小説で提示されるキリスト教的価値観とダーウィンの枠組みの相違点および共通点を取り扱う。特に、利己性と利他性をキーワードとして、環境の中に生きる種と個の関係と、社会におけるコミュニティと個人の関係性について論じていきたい。それを通して、ハーディ小説において、キリスト教批判とダーウィニズムが併置されていることの意味を考察したい。

## 『テス』と『ジュード』における〈信仰〉の問題

向井秀忠

ハーディの小説家としての後期の二作品『ダーバヴィル家のテス』と『日陰者ジュード』は肉体的な社会に対する告発がより色濃いのとなり、とりわけ聖職者や神学者を強く批判するものとなっている。テスは子どもの洗礼と埋葬の一件をめぐる牧師と折り合えなかったことをきっかけにキリスト教に対する信仰を失い、そのことが作品の結末において異教の象徴であるストーンヘンジでの覚醒に結びつくように見える。また、ジュードも、強く願った大学への進学が許されなかったことで大きな挫折感を味わい、スーとの出会いを通してキリスト教信仰の欺瞞性を意識させられる。ただ、当時はキリスト教の信仰のあり方について大いに議論が高まった時期であり、奇しくもジュードはそれを象徴するオックスフォード運動の中心となった大学で学ぶことを切望する。本発表では、『ジュード』をキリスト教の信仰活性運動の文脈において改めて読み解くことを通し、ハーディの〈信仰〉に対する姿勢について再考してみたい。

## 《特別講演予告》

### ヴィクトリア朝随一のベストセラー大衆小説と、 トマス・ハーディの文学世界

井出弘之

私は小著『ハーディ文学は何処から来たか』第4章で、処女長篇『窮余の策』とW.Collins, M.Braddonによるセンセーション小説群との類縁の深さについては指摘した。だがミセス・ウッド『イースト・リン』については及び腰であった(同・第6章)。ところが今回Mrs.Henry Wood, *East Lynne* (1861;Oxford World's Classics, 2005) を三読、四読する機会があり、そのつど目を丸くして驚いた。

<死者?が帰ってみればこはいかに>のgimmick(新手的筋立て)にはではない。ハーディそっくりに‘Nature’はcapriciousなもの、状況(‘circumstances’)が違ったら(But for)と悔やんだとて‘too late’で‘irremediable’、等というキー・ワードを要所に……といった具合なのだ。所詮この世のルールは‘rules of contrary’ですよと語り手!

舞台は前近代の習俗、感性が消え残る地方の田舎町だが、近代化の潮流に抗えぬのもハーディと同じこと。ヒロイン（伯爵家令嬢）の亡母の形見である金の十字架が遠縁の伊達男に踏み壊される、という物語発端の‘Cross’は、色んな暗喩となって結末まで頻出するが、これは彼女の苦難のしるし。加えて地上からの‘聖なるものの喪失現象’（Peter Brooks）への問い返しとも言えるだろう。また逆に、物語冒頭、《East Lynne》館を買収し、エンディングでは下院議員となる超多忙な弁護士ヒーローは、近・現代社会の‘ビジネスの聖域化’を寓意しているかのようだ。

このミセス・ウッドの小説の*New Monthly*誌連載が完結し単行本化されたのは、1861年秋。翌1862年1月に*The Times*紙のSamuel Lucasが「今一番人気は？」とロンドン街角で尋ねた相手は、誰だろう、後にハーディの最初の出版者となるWilliam Tinsley — 彼が「*East Lynne*が面白い」と言うので、Lucasは1862年1月末に長文の賛辞を書く。そして2ヶ月後、増刷につぐ増刷の渦中にハーディは上京しているのだから、因縁はハーディ的に深いといわざるを得まい！

さらに立ち入ったお話は当日、会場で。

## 《内外ニュース》

### 会員の訃報：

本年7月28日、大榎茂行氏（甲南女子大学名誉教授）が他界されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

第56回大会の開催校である清宮倫子先生（茨城キリスト教大学）からのホテル推薦リストが、本号とともに同封されておりますのでご覧ください。

## **The 21<sup>st</sup> International THOMAS HARDY Conference & Festival:**

Dorchester 26<sup>th</sup> July ~ 3<sup>rd</sup> August 2014

Leading Hardy Scholars, Poetry Readings, Lectures, Seminars. Receptions, Suppers, Tastings, New Writing from Wessex, Quiz. Guided Walks, Coach Tours, Drama, Dance and Musical Performances. Book Launches, Exhibitions, Antiquarian Book Fair, Awards.

## 《編集後記》

『日本ハーディ協会ニュース』第70号にご執筆頂きました大榎茂行先生がご逝去されました。

昨年1月、『大榎茂行教授喜寿記念論文集 イギリス文学のランドマーク』（大阪教育図書）の出版祝賀会は、先生の研究者であり教育者であるご立派な面と謙虚なお人柄を象徴するかのようには、厳粛ななかに心温まる雰囲気が出ておりました。この日に先立ち、先生は論文集に寄稿された方、お一人おひとりの論考をご高覧になり、的確なコメントを自筆で便箋に認めてくださいました。正鶴を射たご指摘に納得して、ご丁寧なご配慮に感謝したのは、私だけではなかったでしょう。私事ではございますが、ハーディ協会以外の協会、研究会、読書会でも多大なご指導を頂戴してお世話になりました。ここに哀悼の意を表したいと存じます。

至らぬピンチヒッターからの執筆依頼を快くお引き受け下さり、ご多忙のなか玉稿をお寄せ下さいましてありがとうございました。厚くお礼申し上げます。次号は4月発行、原稿の締切日は2月20日です。論文、随筆は2000字程度、短信、個人消息は500字程度です。奮ってご寄稿くださいませ。ハーディに関する著書、翻訳書も編集者までご連絡ください。尚、HPは昨年9月に変更されました。新URL (<http://thomashardy.justhpb.jp/>) をご案内いたします。